

特集にあたって

鈴木 敦夫 (南山大学)

中部地方は日本の製造業の中心なので、日本 OR 学会中部支部の活動は伝統的に現場に近いものであった。それがよくわかるのは、2009 年から OR 学会中部支部のホームページに連載された、中部電力の情報担当の支配人を務められた本告光男先生の「私と OR」というコラムである。このコラムは日本 OR 学会中部支部の WEB ページの「OR コラム」で読むことができる。昭和 30 年代の熱気が伝わってくる内容で、理論的には整っていないけれども、とにかく必要に迫られて現場で何とか役立てようという OR が本来持っていた熱い思いが詰まっている。

本告先生の後も、中部支部の活動には企業の方が積極的に参加されていて、歴代の中部支部長には、中部電力 (株) の榎本久徳氏、田中庸平氏、名鉄コンピュータサービス (株) の岩田怜氏、トヨタ自動車 (株) の小谷重徳氏、日本ガイシ (株) の飯田次生氏ら、実際に企業の現場で OR を活用している方々が就任している。ところが、飯田氏を最後に、OR 学会中部支部の活動に企業の方が積極的に関わることはなくなってしまった。岩田氏が名鉄コンピュータサービスの社長を退かれる際の中部支部の特別講演で、「企業の現場で役立てるという意味では、大学の先生から得られるものはなくなった」という趣旨の話がされた。企業の方からの大学での OR 研究への警鐘として強く印象に残っている。

さて、このような中部支部の状況は、2008 年から変わり始めた。中部支部の現状に危機感を持っていた支部長の大鑄先生と副支部長だった私は、本告先生にお願いして、先生と食事をしながら、OR が熱気に満ちていたときのお話を親しくうかがう機会を得た。そこで、現場とつながる研究が OR の将来にとって重要だということを再認識し、OR コラムの執筆を本告先生にお願いし、われわれにできることはないのかと 2 人で考え始めた。結局あまり良い知恵は浮かばず、2 人で手分けして賛助会員を訪問して、企業の方に、支部活動に関する要望を聞くことにした。ところが案に相違して、賛助会員のうちの 1 社から、解決すべき問題について情報交換会を開催してもらえれば話題を提

供できるといううれしい申し出があり、ほぼ 2 年間にわたり、いくつかの問題について、われわれ中部支部の会員の大学教員との情報交換を行った。現在、情報交換会は一時中断しているが、またほかの賛助会員の企業にも声をかけ続けて、継続していきたいと思っている。

この特集では、現場で役立つことを目指して活動を行ってきた中部支部の研究のうちの一部を紹介したい。

私の論文は、共著者の藤原祥裕教授 (愛知医科大学医学部麻酔科学講座) と共同で開発している大学病院の手術室に関するスケジューリングのシステムの紹介である。病院の手術室の現場では多くのスケジューリングが手動で作成されていることを知り、何とか自動化できないのかと知恵を絞って開発中である。

柳浦陸憲先生の研究グループの論文は、大学運営の現場に OR を適用した研究の紹介で、大学教員には身近に感じられると思う。身近ではあるが、問題解決に用いる手法はしっかりと押さえ、得られた結果はすぐに実用になるという優れた研究である。

大鑄史男先生の論文は上記の賛助会員の企業との情報交換会を発端として始まった研究に関するものである。私も大鑄先生が初めて企業の方にアイデアを紹介された現場にいたので、企業の方が強い関心を持って熱気のこもった議論になったことが思い出される。

三浦英俊先生らの論文は、南山大学があるホームセンターから受けている委託研究の紹介である。このホームセンターからの委託研究は 6 年目となり、毎年の成果はホームセンターの現場で活用されている。この委託研究では、現場でいかに OR を活用できるかという議論をし、このホームセンターのコスト削減、売上増に貢献できるように工夫を凝らしている。

中出康一先生の論文は「カンバン方式」の研究で大きな成果を挙げられてきた大野勝久先生との共同研究の紹介である。抽象度が高く、難解なようであるが、研究が順調に進めば、論文中に紹介されているようにコンビニの在庫管理など広い業種の現場で活用される可能性がある。私はその可能性はかなり高いと思っている。